前後不覚２

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
前後不覚２

【Ｎコード】
Ｎ３５９７Ｏ

【作者名】
天ヶ森雀

【あらすじ】
前作「前後不覚」の続きです。
未読の方はそちらからどうぞ。
その後の古市と一真の話。

※ＴＩＩＮＡＭＩより転載作品。

彼女たち

「で？　で？　そのあと古市さんとはどうなったの、キョーコちゃん？」

先日同部署の先輩と行った居酒屋よりは、幾分小洒落たベトナム料理の店で、海老とパパイヤのサラダを取り分けながら、柳原栞（やなぎはら しおり）は開口一番こう言った。瞳の中には満開の星とハートが散っている。さながらクリスマスとバレンタインがいっぺんにやってきたかの様だ。

勤務階が遠いからあまり周囲には知られてはいないが、彼女とは月イチペースで食事をする友人だった。歳が近く、同じ会社の男性しかいない部署で仕事をする身として、他言無用の愚痴や不満、外聞を憚る噂話など、女同士の気楽なお喋りを楽しむ。彼女は総務の経理、私は施設の設備に属していた。

一応、会社ではお互い「一真さん」「柳原さん」と、きちんと名字にさん付けだが、会社の外では名前呼びだ。一種の切り替えスイッチである。

「寝たよ」

スペアリブのココナツミルク煮を頬張りながら、私は端的に事実を述べた。

「きゃあ！」

瞳の中のハートマークを大きく膨らませ、栞は嬉しそうに先を促す。

「そんだけ。酔った勢いだったし、そのあとは何もないよ」

「え～～～」

私の返事に、彼女は不満そうに唇を尖らせた。世の女性に漏れず、栞は他人のコイバナ大好きである。もちろん立場が逆なら、不満顔を見せていたのは私の方だったろう。他人の色恋ほど無責任に楽し

めるネタはない。
「古市さん、えっち、下手だったの？」
　栞は無邪気に核心を衝いてきた。大人しくて清純そう、と言う彼女の周りの評価には大幅に誤差がありそうだが、勝手に誤解している方が悪いので、知ったこっちゃない。外見で人を判断しちゃいけないと言う、いい見本だろう。そもそも私は、彼女のそういう開けっぴろげで正直なところを気に入っている。…まぁ、大抵は。
「別に、下手ではなかったけど…」
「へぇ～、そうなんだ～」
　栞は再び面白そうな、もしくは人の悪いチェシャ猫みたいな笑顔を見せて、タピオカ入りの甘いカクテルを啜った。
　実際、彼との行為が良かったのは意外な事実だった。前後不覚なほど酔っていたくせに、彼が私を扱う手つきは驚くほど慎重で優しかった。まるで、彼が工具や精密機械を扱う時の様に。
「大体、先輩は栞に振られたんだよ？」
「あら、それは過去の話でしょう？」
　…まぁ、三日前も過去は過去か。
「寝たのは不慮の事故だよ。酔った勢い。単なる間違い。続きはなし。それよりそっちこそ浅木さんとはどうなったのよ」
「う～～～、今、営業組は忙しいからなぁ…」
　話を降られて、栞は顔をしかめる。実は彼女は営業の若手とこっそり付き合っている。笑顔がさわやかな、エムズのスーツが似合う中堅どころである。
　もっとも、その事を古市に告げる気はなかったし、古市自身が動かない限りお節介を焼くつもりもなかった。それこそ他人の恋路である。迂闊に絡んで馬に蹴られるのは避けたい。
　案の定、彼は当たって砕けた訳だが、それはそれで仕方がない。後輩として、できるだけの事をしたつもりだ。多少、想定外の事も起こったが。
「不慮の事故」に関しては、彼自身かなり混乱していたようだけ

ど、今後私たちに何らかの展開があるとも思えなかった。お互いに対して特別な感情が確立していないのだから、展開しようがないだろう。こちらからもアプローチするつもりはないし。
「かまってくれてないんだ、浅木さん？」
ニヤリと笑って見せると、栞は唇を尖らせて拗ねた。時期的に営業は繁忙期と解ってるから、不満を言うわけにもいかないのだろう。
「キョーコちゃんのイジワル」
なるほど、こう言う顔がいかにも女の子で可愛いよなぁ。私にはできない芸当だ。
「まあいいや。ところで、最近やってたドラマだけど…」
「ああ、『星の恋人』？」
「あれって、相手役の彼がさ…」
「ああ、あのいつも泣きそうな眉毛の！」
考えても仕方のない事は仕方ない。それが私の信条である。
お互いのデリケートなラインを適当に確認牽制しつつ、私達はさっさと話題を切り替えて、無難な流行りのメロドラマの内容に流れていった。

彼女たち（後書き）

食べ物率が高いのは、作者の嗜好なので仕方がないのです。

日常のひとコマ、あるいは日常的な闘い

「一真、今日は打ち込みはいいから、古市の手伝いを頼む」
「分かりました」
設備課課長、坂下さんから直接声がかかったのは、データを打ち込んでいた午後の事だった。監視パソコンが収集している日々のデータを打ち込んでまとめるのは、通常業務ではあるが、緊急性はない。
「悪いな。屋上の冷却塔の動きが悪いから、一緒に見てくれ」
「はい」
課長に返事をしてから振り返って古市を見ると、彼は作業着に着替えて、必要な工具を鞄に詰めている。
「先輩、こっちも着替えた方がいいですか？」
「いや、一真は制御盤の方を頼む」
「了解」
必要な事だけ言うと、さっさと行ってしまった。その態度がいつもより素っ気ないと感じるのは気のせいではないだろう。
（まぁ、仕事に支障を来すほどバカじゃないだろ）
あまり深く考えてもしょうがないので、そのまま私は制御盤のある機械室へと向かった。

「結局、フロート弁の固着ですか」
内線用のＰＨＳで連絡を取り合いながら機械を動かしつつ、不調の原因は水位調整部品の動作不良だと判明した。
「おう。フロートのアームが固まっちまってた。三方弁じゃなくて助かったな」

「電気部品の取り寄せとなったら、また金かかっちゃいますもんね」
「課長の頭がまた薄くなっちまう」
ニヤリと悪態を付けるのは安心したからだった。とかく設備は金喰い虫なのだ。小さな部品でも、ものによっては五桁から七、八桁簡単にかかってしまうし、だからと言って生産性があるわけでもないから、自分たちで直る範囲ならそれに越した事はない。なまじ最近色々劣化の時期が重なっているので、尚更である。
合流してアームの固着を直し、ついでに他で使用しているフロート弁の正常動作も確認して作業を終えた。
冷却塔のある屋上は、普段施錠されているので人気(ひとけ)はない。マスターキーでいつでもどこでも入れるのは、設備の特権と言える。
外壁に並び、手すりにもたれて休憩しながら、ふと古市は胸ポケットを探って舌打ちした。タバコだと気づいて、自分のを差し出す。恐らく着替えた制服のポケットに入れっ放しなのだろう。
古市は、少し迷った素振りを見せたが、何も言わず受け取った。
ライターの火を差し出すと、旨そうに煙を大きく吐き出す。
「つくづく、屋上だけは最高だよな、うちのビル」
「ですね」
地上８０メートル程の屋上は、この辺りでは一番高く、視界を遮るものは何もない。今日は天気も良く、風が心地よかった。
「…一真ぁ」
「何ですか？」
「……」
「先輩？」
「俺さぁ…」
「はい」
「…いや、何でもない」
「……」
「待て！　分かった！　言う！　だからそのパイレンを下ろせ！」
うちで使う最大のパイプレンチは、全長５０センチくらいでゆう

に5、6キロはある。殺傷能力は充分と言えるだろう。言いかけて止められると、精神衛生上とても気持ち悪い。
「…つまり、その、俺は―」
古市が何か言いかけた時、胸ポケットの内線ＰＨＳが鳴った。
『古市、動けるか？』
受話器越しにも課長の大きなだみ声が響いてくる。
「大丈夫ですけど、何かあったんスか？」
『プールのバイトが薬品間違えやがった。茂木は別件で点検口に潜ってて手が離せん。6階の濾過機室行ってくれ』
「！　分かりました！」
古市の顔付きが一変する。緊急事態の匂いをかぎとって、咄嗟に身構えた。
「一真、6階だ！」
「了解」
詳細は移動しながら聞けばいい。行動は迅速且つ的確が基本。手元の道具を素早く纏めると、私達は屋上階段からキャットウォークを駆け降りた。

トラブルは多発する。
何もない時の設備課は暇なくらいだが、何故か起こる時は一斉に起こる。それが連動か単発かは別として。他の設備員は、電気配線の不調に対応しているらしい。
我々が駆けつけた時、機械室は白っぽいガスが充満していた。
入り口で、スポーツクラブのスタッフジャージを着た若い男が泣きべそをかいている。
「古市さん、すいません、俺…清澄剤と塩素剤間違えて…」
うわ、塩素とは最悪な。家庭用の洗剤にも「混ぜるな危険」と書かれるありふれた危険薬品である。即ち、有毒性のガスが出ていると言う事だ。皮膚摂取はないだろうが、目に軽く刺激痛があった。

「分かった。俺が入るからドア閉めてろ。一真は現状報告！」
「先輩、マスク取ってきます」
「間に合わねぇよ！」
私の制止も聞かず、首にかけていたタオルを顔に巻くと、古市はそのまま飛び込んだ。
「ったく！　あの人は！」
大きく舌打ちを打つと、急いで取って返し、監視室に置いてある簡易防護マスクとアイバイザーを取ってくる。
「先輩、これ！」
「おう！　薬注装置はストロークで止めた。あとは希釈すんぞ！」
「了解。課長には説明して、ガラリの強制排気は頼んできました」
「客に影響は？」
「今のところ大丈夫です」
間違えて入れられたのは清澄剤のタンクである。塩素の薬注装置は止めていないから、プールの塩素濃度は下がっていない。中央でデータのモニタリングもしてるから、何かあれば連絡がある筈だ。幸い機械室はバックヤードにあるから、ガスが客側に流れる心配もなかった。表にも機械室はあるから、そちらならやばかっただろう。
清澄剤に関しては、常注量が低いから止めても急に水が濁る事はないが、混ざった薬が配管やチューブを傷めたら、おおがかりな部品交換が必要になってしまう。中和剤なんてないから、こうなったらひたすら水で薄めて流すしかない。床はコンクリで排水口もあるから、水浸しになっても問題はなかった。
奥にある水道からホースを引っ張って、タンクに水を流す。開栓器を全開にしてからホースを固定し、制御盤に異常がないのを確認してから、ガスが薄まるまで一旦退避し、再び安全を確認して機械室に入れる様になるまでは結局一時間を要してしまった。

日常のひとコマ、あるいは日常的な闘い（後書き）

トラブルは多発します。本当です。

労働の後は居酒屋へゴー

私服に着替えて通用口を出る頃には、空に星が瞬いていた。
「あー、まだ塩素くせぇ…」
いわゆる漂白剤の匂いである。指や髪の毛に匂いが染み付いてしまっている。
「しばらく落ちませんよ、これは」
「それより作業着が斑になっちまったよ」
「元々汚れてたんだから、それは大丈夫ですよ」
「悲しくなるからそれは言うな！」
危険性がなくなってから、薬注装置を分解清掃して二時間余り。その後、手分けして後片付けと報告書の作成。途中、他の設備スタッフも遅番で来ていたが、やりかけの仕事を時間だから「はい、交代」と言うわけにはいかない。
幸い致命傷になるほどの故障はなかったから、一緒に床の清掃を手伝わされた件のスタッフも、厳重注意で済むだろう。組織上部署が違えば系統も違うから、その辺は我々の管轄外だ。まぁ古市に怒鳴られながら水？きをしてたから、反省くらいはしてるだろう。
「どうする？　晩飯でも食ってくか？」
「そうですね。帰って作るのもかったるいし」
有難い事に給料は出たばかりだったから、馴染みの居酒屋へと足を向けた。

「あー、今日は参った」
「久しぶりにひどい目にあいましたねー」
「喉もまだいてえよ」
「大丈夫ですか？　酒なんか飲んで」
「いいんだよ、これは。アルコール消毒なんだから」

「ハイハイ」
温かいおしぼりで手を拭い、一夜干しのホッケに箸を入れる。
肉体労働後の気だるい身体に、冷たいビールが染みわたっていくのが心地良かった。
「でもまあ、大事に至らなくて良かったけどな」
「ですねー」
「死ぬかと思ったぜ」
「大体、古市先輩はなんでも闇雲に突っ込む癖があるし」
「知るか！　体が先に動くんだよ！」
「あれでしょ、2，3年前に蒸気管が吹いた時も、一人で走ってって…」
「やな事覚えてるなあ、お前…」
心底嫌そうに顔をしかめるのが面白い。
「あの時も煙もくもくでしたもん。忘れられませんよ」
「どうせ、誰かがバルブ閉めなきゃならなかったろうが！」
「まあ、そうなんですけどね」
つい、にやにや笑ってしまったから、からかわれているのが分かったらしい。
ぐいっと酎ハイをあおると、不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。
「怒ったんですか？　やだなあ、軽い冗談ですよ」
「うるせい」
本気で拗ねている。こう言うところが結構可愛いなんて言ったら、真っ赤になって怒るんだろうな。言わないけど。
「古市先輩」
「……」
「先輩、聞いてます？」
「……」
「おっとこんな処に特大モンキーが」
「何でだよ！」

特大サイズのモンキーレンチもパイレン同様殺傷能力充分である。もちろん、こんなところに持ち歩いているわけは無いけれど。単なるハッタリである。
「あ、やっとこっち向いた」
「〜〜〜〜〜！！！」
「昼間、屋上で」
「あ？」
「何か言いかけたでしょ？　あれ、何だったんですか？」
「……」
「マイナスドライバも使いようによっては」
これは本当に持っていた。目とかに突き刺すと結構痛いはずだ。
「何でそんなもんが鞄から出てくるんだよ！」
「護身用です。一応、女子ですから」
ニッコリ笑った私に、古市は大きくため息を吐く。
マイナスドライバを目の前に差し出したのが功を奏したのか、古市はぽつりぽつりと話しだした。
初めから素直にしゃべりゃ良いのに。
「…だからさあ、俺は結局こう言う裏方仕事が好きなんだなあ、と思って…」
「ふい？」
「地味だし！　こう、誰かに目の前で喜ばれる様な仕事でもないけど…！　なんて言うか…それでも、屋上からうちのビルを見下ろしたり、帰りに見上げたりすると…」
「すると？」
「……」
「すると？」
「その、つまり、…俺達が、このビルを守ってるんだなぁ、とか思ったりして…」
照れているのか、目元がほんのり赤くなっている。
「古市先輩…」

「今日みたいのは勘弁だけどな」
仏頂面なのも照れ隠しだろう。
「……」
「笑いたきゃ笑えよ！」
「あはははは」
「笑うな！」
「冗談ですよ。笑いません」
「今、笑ったくせに！」
「忘れて下さい」
クサい事を言った自覚はあるのだろう。耳も真っ赤になっているのは、アルコールのせいだけではあるまい。
それでも、言わんとしている事は自分にだって分かる。
建物中を走る配管や電気コード、安全を守る幾重ものシステム。皆が意識せず何気なく使っている様々な設備が、当たり前に動く事が我々の大事な仕事なのだ。
「かっこいいですよ、古市先輩」
「うるせー」
「本当です」
「失言だった！　忘れろ！　おっちゃん、泡盛ロックで！」
自棄になって酒をあおるこの人の、可愛い事と言ったらどうしよう。
「良かったですね」
「何がだよ」
「失恋の痛みからは立ち直ったようで」
「はぐっ！！！」
胸を？き毟るようにして突っ伏すところを見ると、うっかり傷口を広げてしまっただろうか。
「すみません、今のも忘れて下さい」
「お前なぁ…」
「今日は奢りますから！　おっちゃん、ジャーマンポテトとイカリ

ング追加！」
「へい！」
いつもの親父が景気良く返事した。
「そもそも、お前が！」
「何ですか？」
何となくふわふわと楽しいのは、酒のまわりが早いのだろう。空きっ腹に結構飲んだしな。
「…まだ落ち込んでたら、慰めてくれるとでも言うのかよ」
こちらを見ずに、ぼそぼそと古市がすごい事を言った。

酔っ払イズム

「いいですよ？」
考えるより先に答えてた。
「え！？」
あんぐりと口を開けているのがおかしい。思いついて人指し指を目の前に立ててみる。
「1回1万円でどうですか？」
「金、取るのかよ！」
「ソープに行く事を考えたら安いじゃないですか」
「なんでお前がそんな事知ってるんだよ～！」
古市はなぜか泣きそうになっている。まあ、普通の女子はあまり知らない、かな？
「値段の事なら…近道なんですよ、ソープ街」
黒服のおっさん達に客ひきされるのが玉に瑕だが、色んな国の城を模した建物が立ち並ぶ通りは、明るくてアパートまでのいいショートカットになっている。イヤでも目に付く大きな看板から、相場は知れた。と言うか、そもそも世の男達はそんなにそんな事に金を払ってるのかと、初めは驚いたものだ。
けれど、不意に古市の顔がシリアスになった。
「お前…、そういうのやめろよ」
「何がですか？」
その言い方にカチンと来た。そういうのって、何？　ソープの値段を知ってる事？
「いい加減にしてくださいよ。今まで散々女としてなんか見てなかったくせに、一回寝たくらいで女扱いですか」
つい普段なら言わない本音が出た。似合わない。以前の古市なら、そんな事は言わない。笑い飛ばして終わりだ。最近のこの変化が、

妙に癇に障る。
—あれ？　そうか、最近自分はイライラしていたのか。楽しいと思ったのは、どうやら浮き足立ってたらしい。変な緊張感が気持ち悪くて、更に神経を逆撫でる。楽しいのと気持ち悪いのが背中合わせに踊ってるみたいだ。
「そんなんじゃねえ」
「そんなんじゃなかったら何ですか。別にいいですよ、古市先輩ならもっかいしても。…まぁまぁ良かったし」
「まぁまぁゆーな！　…じゃなくてっ！」
二の腕を掴まれた。真剣な目が私を見ている。仕事以外でこんな顔するの、初めて見たな。
何を言われるのかと身構えてたら、掴まれた腕は外されて、目も逸らされた。喉の奥から低い声が響く。
「自分を…安売りするような言い方はするな」
「…！」
…びっくりした。驚いた。えーと、想定外の方向からいきなり来たぞ？
何を驚いているのかよく分からないけど、ショックで頭の中がぐわんぐわん言っている。
やっばー…。
今のはちょっと来たかも。あまりの驚きに近くにあったグラスをあおってしまった。
「おい、一真、それ俺の泡盛！」
自分のビールと間違えて、泡盛をロックで開けたらしい。
えらく強いアルコールの刺激が喉を焼いた。ついでに脳味噌も焼けていく。鮮やかな電気ショートがビジュアルで浮かんだ。
バカじゃないのか、この人は。
バカじゃないのか、この人は。
いや、自分がバカなのか？
やばい、酔いがいつもより早くなってる。ぐるぐると星が回るの

が見える。
「一真、おい、目ぇ座ってるぞ、お前」
「そんなこと、ないれす」
「ろれつも回ってねえし」
「気のせい！」
「おーい、一真？」
古市の声がやたら遠くに聞こえる。
やばいな、このままだと、とんでもない事を口走りそうな。
やばい、今すぐ逃げなくては。
「帰ります」
「帰るって、お前！　おっちゃん、勘定！」
古市は慌てて尻ポケットから財布を出している。
「今日は私がおごる約束れふ」
「あー、あー、また今度な」
「じゃあ、逃げます」
「ちょっと待て、こら！」
上着を掴んで店から駆け出す。
何がやばいのか分からないけど、とにかくここに居たくなかった。
いや、正確には古市と一緒にいたくなかった。
それなのに、店から出た途端、腰と足が心を裏切る。ふらついて転びそうになったのだ。
「一真！」
慌てて古市が私を抱きかかえる。
「…たく、危ねえなあ…」
舌打ちを打ちながら呟く声が、耳元で聞こえる。
恥ずかしい。情けない。格好悪い。
そのまま、どこかへ消えてしまいたかった。

酔っ払イズム（後書き）

酔っ払いは思考がループしやすくなります。

一生の不覚（前書き）

言いたい事と言いたくない事は、時として同じだったりする。

一生の不覚

結局、私は古市の背中におぶわれていた。
いかに女子といえども、１６８センチある自分は決して小柄ではなく、背負ってもらうなんて初めは当然辞退していたが、古市に押し切られた。曰く、ふらついて歩いているのを見ている方が落ち着かない、とかで。
古市もでかい。背中がやたら広い。
…まあ、知ってたけど。
いつもこの背中を見て走らされているのだから。
アパートの玄関口に着くと、「鍵」とぶっきらぼうに言われ、上着のポケットを探って渡した。
古市は私を背負ったまま鍵を開け、中に入る。そのままどさっとベッドに投げ出された。
「乱暴だなあ」
言いながら笑ってしまう。まだ酔っているのだろう。
「明日はお前、早番だからな。ちゃんと起きろよ」
一応先輩らしくそんな事を言うと、古市は出て行こうとしていた。
そういや、入る時鍵を閉めてなかったな、と思い出す。
「泊まらないんですか？」
仰向けに転がったまま、両腕を顔に乗せて、そんな事をいってみた。冗談だけど。
「…お前はどうして欲しいんだ？」
何故か静かな古市の声。自分がどうして欲しいかなんて、酔っ払った頭で考えられる筈も無いと思う。私が教えてほしいくらいだ。
それなのに、言葉はすんなり出てきてしまった。
「泊まってって欲しい」
あれ？　そうなのか？　我ながら子供がおもちゃをねだる様な声だ。

恐らく部屋の真ん中で立ち尽くしているだろう、古市の気配が窺える。本気かからかっているのか、考えているんだろう。…えーと、どっちだろう。自分でもよく分からない。
「でも、他の女の名前で呼ばれるのはイヤです」
自分の声がなぜか遠くから響く。言うつもりのなかった言葉がするりと出てきてしまった。と言うか、自覚の無かった本音が急に出てきてびっくりした。気にするつもりはなかったのに、本当は気にしてたのか、あれ。
「…悪ぃ。覚えてない」
「1回だけですけどね」
笑って言ったつもりだったけど、そんな風に聞こえなかったかも。
「すまん」
「謝る必要ないですよ。先輩が悪いんじゃないですから」
「……」
「ちょうど自分も溜まってたから、誰かの代わりでもやれるならまあいっか、って…」
「お前なぁ…」
あけすけな言葉に古市が頭を抱えた声を出す。
知るか。こっちはもう3年そんな職場に居るのだ。
男同士の日常会話なんて「ヤる、ヤらない」が殆どで、いちいち気にしててもしょうがないからスルーしてきた。これくらいでセクハラとか騒いでたら、男性職場は務まらない。そもそも正直なところを男なら良くて女は言っちゃいけないなんて不公平ではないか。女にだって欲望はあるのだ。
「…成り行きだし、あの状況だし、合意の上だから先輩は悪くない。謝る様なことじゃありません。ただ…承知の上のつもりだったのに、先輩が最後に栞の名前を呼んだ時、少しだけ悲しくなったから、びっくりしたんです」」
それは、彼との行為があまりに気持ち良かったからで、恋とかじゃないと思う。でも、今の台詞はそうとられてもおかしくはないな。

それとも本当にそうなんだろうか。それって即物的過ぎないか？
　そもそもなんでこんな事を自分は喋ってるんだろう。酒のせいで普段は奥底にある本音回路と口が直結してしまったみたいだ。いきなり知らない借金を突きつけられたようで、今、自分が一番ショックかも。
「……」
「すいません。これも忘れてください」
　今日は何回この言葉を言ったんだか。
「送ってくれてありがとうございます。もう、帰っていいですよ」
「……」
「お願いだから帰ってください。今はちょっと混乱してるけど、明日には元に戻しますから」
　固着したパーツはペンチで動かし、汚染されたチューブは分解して水洗いすればいい。大丈夫。ちゃんと元に戻せるはず。致命傷には至っていない。
　それなのに、古市は帰ろうともせず近付いてきて、ベッドの横に膝をついた。大きな手がクシャリと私の頭を撫でる。
「バーカ」
「何ですか」
「バカ一真」
「あんたにだけは言われたくなかった！」
「何でだよ！」
「失恋してざあざあ泣いてたくせに」
「うるせーよ」
「酔っぱらいの戯言なので、気にしないで下さい」
「…ったく、お前は」
　苦笑する声が聞こえた。何故か優しい声だった。
「わかったよ。この間の事は謝らない。でも―、」
　そう言って、顔を覆っていた私の両腕を開き、視線を合わせる。たぶん泣きそうな顔をしているから、見られたくなかったのに。抵

抗したくても、腕に力が入らなかった。
「約束する。今度はちゃんとお前の名前を呼ぶよ」
やばい。まぶたに熱がこみ上げてくる。泣き出すのをこらえて歯を食いしばるから、声も出せなかった。
ここで泣いたらそれこそ泣き落しじゃないか。そんなの情けなさすぎる。
喉の奥からくぐもった唸り声だけが僅かに漏れる。
やばい。このままじゃ流される。
古市はおかしそうにそんな私を見下ろすと、ゆっくり一言呟いた。

「響子」

その一言で、なぜかもう流されてもいいやと思ってしまった。
だから。
彼の言う「今度」がいつなのか、突っ込めなかったのは、一生の不覚である。

一生の不覚（後書き）

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。
ひたすら馬鹿な話を、と思って書いたものですが、もしお気に召しましたら評価や感想など頂けると幸いです。　雀拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3597o/

前後不覚２

2011年4月27日14時25分発行